

真言宗智山派における教化研究(伝道学)の現況とこれから —檀信徒と共に寺院を元気づける方法論—

片野 真省

はじめに

天才画家の名をほしいままにしたフィンセント・ファン・ゴッホ。しかし、彼自身が活着している時に売れた画はたった1枚だったと伝えられている。天才は死してしばらく後に、その称号を与えられたことになる。それは同じように天才音楽家と誰もが認めるヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトもそうだろう。およそ30年前に上映されたアカデミー賞作品「アマデウス」で描かれる主人公のモーツァルトは、自らの才能が評価されない悲しみと孤独に苛まれ、失意のうちに交響曲「レクイエム」を書き上げながら死を迎える。

ゴッホが拳銃によって自殺をはかり、2日後に死を迎えたのは1890年7月末のことである。その月に描いた「カラスの群れ飛ぶ麦畑」はゴッホ絶筆の作品とも伝えられている。ゴッホは弟のテオにあてた書簡でこの作品のことをこう記している。「僕は思い切って悲しみや極度の孤独を表現しようとした。」そして評論家の小林秀雄はゴッホのこの作品に衝撃を受け「これはもう絵ではない。彼は表現しているというより寧ろ破壊している。」と語っている。

ゴッホもモーツァルトも天賦の才をかたちに残して逝った。その後の評価を自らは知ることなくこの世を去ることになる。しかしながら、彼らの遺したものはその後永く、数知れぬ多くの人々の心を射抜き、魅了した。時を経て忘れ去られるものと、時を経てずっとずっと語り継がれるもの。人の心を突き動かし、支えとなるもの、そうした本物に巡り合えるなら、その人にとってその出会いはずっとかけがえのないものとなるだろう。

いま我々が活着しているこの現代社会には、圧倒的な量の情報が垂れ流され、人々はその渦に巻き込まれて疲弊しきっているかのようである。自分に最も適した必要な情報が何かも分からぬまま、その波に翻弄され、自らの立ち位置も分からなくなり、自分の姿を確かめられないままリアリティを喪失している。自分にとって何が支えとなるのか、かけがえのないものが何か知らないまま、無為に等

しい情報の波に息もできないありさまである。

時が流れる中で、本当に人の心を突き動かすような本物でも、見つけられないまま名もなきままに星屑のように消えていくものも数多あるだろう。見いだされればゴッホやモーツァルトのようにその名も作品も、真実を飛び越えてまで語り継がれる。そして、なかなか出会い難き本物に出会えるなら、人々は突き動かされ感極まり、そして心揺さぶられる刹那に、リアルな自身を実感することになる。だからこそ本物が目の前にあるなら、それを知り得る者は本物を広く伝える使命を負っていると言えるかも知れない。リアリティを持つことが難しいこの現代の情報化社会だからこそ、自分の支えとなりかけがえのないものを見つけるのが至難の業である今だからこそ、良いものを伝え弘めることが我々僧侶にも求められている。

つまり、仏の教えが素晴らしいものだ実感していれば、自然と伝えずにはいられない。垂れ流される情報の激流を突き抜けて、衆生に届けと願わずにはいられない。さらに言えば、寺院のご本尊のそのほとんどは、その地で長い時間かかって祀られてきた聖なる存在である。長い歴史の中でその地の人々が救いを求め、支えとしてきた祈りの対象である。良いモノ、本物だからこそ長い歳月に渡って、今もそこに存在している。類まれなる素晴らしい存在がここにあることを忘れ去られることなく伝えるのは、我々の使命である。なぜ、教化を行うのか？ その問いかけの答えがここにある。本論は教化の現況と将来に向けての教化のあり方を、寺院と檀信徒の関係性の中から探してみたい。また筆者がこれまでに伝道学や教化研究に関わる教育・研修機会で培ってきたことをここに書留めることで、真言宗智山派の教化研究推進の一助になれば幸いである。

1. 教化とは何か？一何を伝えるのか？どう伝えるのか？

「教化とは何か？」という問いかけや教化の概念規定については、もうすでに様々な機会に述べてきたのでここで詳しく記すことは避けよう。シンプルに表せば「釈尊や祖師の教え(仏に成る道)を広く社会一般・檀信徒に流布する(伝わる)」ということになる。また伝道学も教化学、教化研究も教化・伝道に関する研究・学問ということになる。しかし、教化が研究や学問の対象になるのかどうか、この議論は本宗においてほとんど喚起しないのが現状である。だが、宗派が教化推進を行政の一つの柱として、具体的に推進施策を策定・展開している以上は、そ

真言宗智山派における教化研究(伝道学)の現況とこれから (片野)

の推進施策の効果を検証し、新たな施策を策定するための研究は不可欠である。同時に「伝える側」と「伝えられる対象」さらには「伝えられる内容」と「伝えるための方法論」は、その関係性を含めて十分に研究の対象となり得るものではないか。釈尊や祖師の教えをいかに伝えるか？ 宗派は、寺院は、僧侶は、何をどのように檀信徒に伝えるのか？ 教化研究の原点はここから始まる。

本宗においては、古くは伝道と言われ、現在では伝道よりも教化と称されるのが現状である。伝道とは何か？ と言えば、「仏に成る道を伝え広める。故に仏の世界を実感し、仏と出会い、仏に成ることが究極の前提となる」ということだろう。では、仏の世界とは何か？ 仏の世界とはどこにあるのか？ と問われたら何と答えるのか？ 「仏の世界は自坊のご本尊さまが祀られている空間そのもの」であろう。つまり伝道の意味を突き詰めると、それは仏に成ることの意味(成仏論)が問われることになる。智山勤行式の普回向文はまさしくこのことを我々に問いかけている。

成仏するために何が必要か？ 我々は真言僧侶となる際に、教相・事相・教化を身に付けてゆくわけだが、この3つの関係性を次のように考えることができるだろう。

教相……仏の教えを正しく理解する

→ 仏に成る道を広める。そのためには釈尊と祖師の教えを正しく学ぶ。

事相……仏の教えを実感・体現する

→ 教相を実感するため観法・法要・儀礼などを実践し体現・継承する。

教化……体感したことを表現する

→ 教えの正しい理解と体現によって得られる悉地を表現し伝える。

そして、この教相・事相・教化は真言僧侶にとって最終目的たる仏に成るため、どれも欠くことができないものである。普回向文に「我らと衆生と皆共に仏道を成ぜんことを」とあるように、素晴らしい教えを正しく理解し、理解したことを体感し、身に染めたことを遍く一切に及ぼすことが、その目指すところとなる。ゆえに表現したことが伝わる、つまりは表現手法の実践的展開によって相手に伝わることまでが教化となる。伝道学は仏に成る道とは何かを衆生に伝え、仏に成る道を共に歩むことである。

この教相と事相と教化の関係性は、ひとり真言僧侶の内においてバランスを保ちながら培われることが望まれる。教相を学び、事相を修し、世間に向かって教

化を実践する。しかし、この理想型をそのまま実現することはなかなか難しい。寺院の法灯を受け継ぎ檀信徒に応える現場では、理想と現実のギャップに誰もが忸怩たる思いを山ほど抱えてしまう。そんな焦燥感に塗れた呪縛に苛まれながら、理想を貫くことが叶わずに現実には時間を浪費するのが現場である。そんな現場だからこそ、寺院において我々はひたすら檀信徒教化に打ち込む他はないのだと思う。檀信徒と接する機会と時間が多ければ多いほど、檀信徒の切実な想いが痛いほど伝わってくる。檀信徒と共に寺院での教化活動を充実させる。そうすれば自ずといつの間にか、事相も教相も身に付いてくるのである。教相を学び、事相を修することが必要と次第に感じ取る。それこそが真言寺院の空間で行われる本来の行事であり教化活動である。檀信徒のための教化活動は、真言僧侶自身のポテンシャルを引き出す結果をきっと導き出してくれる。このことは智山ジャーナルの巻頭言に同じように述べられている。

2. 教化研究・伝道学の要素—教化における種々の構造

真言宗智山派における教化研究および伝道学について論じる際に「誰を教化するのか?」「何を教化するのか?」「どう教化するのか?」という問題に応えることが求められる。つまり教化の構造をどう明確にするかである。まずこの構造を認識し、その構造に最も有効な教化が行われるには、何が必要かを明らかにしてゆくことが求められる。教えを弘めるための教化構造の考察は、教化研究に欠かせない要素である。それを以下に考えてみたい。

a. 宗団における教化の構造

既成教団たる真言宗智山派が展開する教化は、かつては宗団が教化方針と施策を打ち出し、それによって現場の寺院が檀信徒教化を行うという「理想と現実のギャップ」を生み出すものであった。この組織構造は当たり前の組織論であるが現状にほとんど即応しなかった。こうした構造下で展開された教化運動「つくしあい」が効果的に機能しないのは、いま顧みれば当然の帰結である。「寺院と檀信徒の理想を求めるベクトル」に現場が応じられなかった。なぜ応じられなかったのか? それは事件(現実)が現場で起こっているからである。

現場で起こる問題に適応する教化推進施策を模索したのは各宗派も同じである。宗勢調査によって既成教団の現実、つまり宗団のありのままの姿を顕わにしようとした。本宗では、宗勢調査によるデータの蓄積と、研究機関が主導した地方教

化研究会開催で多くの宗内の声を集約することから「つくしあい」に変わる新しい教化推進施策の策定の環境が備わった。そして、智山教化センターが企画した教化推進施策は、宗内議論を経て、宗派の教化推進施策として平成9年4月から宗内に悉知される運びとなった。

この施策の教化組織構造は「宗団(指導者)―教区(教区長)―寺院(住職・教師・寺庭婦人)―檀信徒」である。一見、何の変哲もない構造だがポイントは大きく2つある。ひとつは地域性。もう一つは経済格差がもたらす寺院の格差である。いわゆる地域性と経済性という日本社会の構造そのものが本宗にも当てはまり、より深刻化している。それをどうするか?である。つまり宗内で教化推進を有効かつ現実的に行うためには、地域性と経済性の格差に対応できる教化推進施策を講じなければならない。このための役割を果たす鍵が「教区活動の充実」である。宗務庁の出先機関としての性質から教区管内寺院の活性化をフォローし、地域人材の養成・確保という宗派の人材養成の一翼を担う役割を教区に期するのがこの組織構造である。

寺院の経済基盤が一層脆弱になる中、個々の寺院が実行できない檀信徒教化をフォローし、管内住職・教師そして寺庭婦人会・布教師会・青年会が総力を結集して寺院の活性化を推進する。それはそのまま宗派の教化推進のみならず行政の施策推進にもつながってゆく。寺院が元気にならなければ、宗派の発展もあり得ないという当たり前の図式を、宗内に早く悉知することが急務となっている。宗団教化は、教区活動の充実により教化推進が機能するという構造によって成り立つのである。

b. 寺院における教化の構造

宗団の教化構造の次に、今度は寺院と檀信徒による関係性を構造的に見てみよう。寺院はどんな機能を有するのか、「寺院とは何か?」と問われればそれは、ご本尊さまをお祀りする場所であり、仏の世界を顕現する空間ということになる。「無上甚深微妙の法」をビジュアル化したもの。ご本尊の浄土であり、檀信徒が死んだ行く先……とも言えるだろう。寺院の中核はご本尊であり、仏の教えを正しく理解し、ご本尊への信仰を弘める役割をその寺院の住職が担っている。そして、その寺院と縁ある衆生、つまり檀信徒が寺院を訪れるという構造を再確認することが必要である。

つまり「ご本尊―住職・寺族―檀信徒」という構図である。檀信徒が祈る時―

亡き人の冥福を祈る、願いが叶うように祈る一には、檀信徒の篤い想いを背に受けながら、住職はご本尊さまと向き合い、ご本尊さまの威力によって葬儀で引導を渡し、追善回向、さらには祈願を成就させる。その一方で、今度はご本尊さまを背にして、その教えを檀信徒に向かって分かりやすく伝え弘めるのである。住職はご本尊さまと檀信徒のご縁を結び、絆を深める媒介者ということになる。いま、ご本尊と檀信徒を結びつける役割を我々はどれだけ意識し、実践しているか？ 本尊の存在意義、本尊に対する信仰をその地域に伝え広めようとして心を砕いているか？ いま無縁社会と言われる現代社会だからこそ、ご本尊の救済を地域の人々に及ぼすこと、それが公益性とも結びついてくるのであろう。

「以我功德力 如来加持力 及以法界力 普供養而住」の意味を、我々は今一度この身深くに刻むことが求められている。ご本尊の威力と檀信徒の救いを求める思い。その橋渡しをしてご縁を結ぶ。だからそのために教化が必要となる。ここに提示する教化構造のうち、特にこの寺院における教化構造に関する視点は、これからの寺院の存在価値、存立基盤を左右することになる。また、すでに提言している菩提寺の「ご本尊への信仰心を確立する」ための年中行事「本尊まつり講」は、檀信徒と共にご本尊の信仰を育み、深める契機となる。さらに寺院に起居する住職・教師は、ご本尊のご縁日での本尊法の修法、御影供や報恩講での修法も寺院にお祀りされる本尊・両祖大師への報恩謝徳、寺院における信仰をかたちとするものである。毎朝、法衣を纏って勤行することも含め、こうした誰でもすぐにできる実践が、寺院活性化の第一歩となる。

c. 家の宗教(仏事・先祖供養)の構造

家の宗教はいま、檀家に確かに息づいているのだろうか？ 先祖崇拝はもはや寺檀関係の中に成り立たなくなっているのか？ そんな危惧を抱きながら、この構造が寺檀関係の根幹となることを検める必要がある。「お仏壇とは何か？」と檀信徒に問われれば「菩提寺の中心(内陣)を凝縮したもの」ということになる。お仏壇を通じて日常的な祈りを習慣化させ、一方、菩提寺の年中行事で非日常的な祈りによる宗教的感動を培う。それが寺檀関係の基盤であらう。

つまり、檀家では毎日、お仏壇(ご本尊と亡き人=ご先祖さま)に向き合い、一日の無事を祈り、一日の無事に感謝する。今いのちあるものの願いを祈り、今は亡き人の冥福を祈る。家庭におけるお仏壇は、日本人にとって日常に祈りを捧げる聖なる空間と言えるだろう。私たちは、日常の生活を仏さま、ご先祖さまに見守ら

れることで日常の行為を戒めてきた。生活の規範は、お仏壇の中の空間に照らし合わせてきたのである。「仏さまが見ている」「ご先祖さまに申し訳ない」という規範は、現代社会では古めかしく堅苦しい感覚かもしれない。しかし、お仏壇を拝み、家の中に亡き人の魂の存在を折に触れて感じながら暮らす生活様式は、これまでの日本人のモラルをかたちづくってきたと言えるのではないだろうか。

日常においては亡き人(ご先祖さま)の魂を感じ、仏さまのご加護を実感する。そして、非日常には菩提寺を参詣して、年中行事によって四季折々に仏の世界に身を置き、願いが叶うように祈る。また亡き人の仏事(年回忌法要など)を営み、追善回向によって現世安穩・後生菩提を祈る。このように日常と非日常に営まれる習慣化した仏事によって、家の宗教は脈々と伝えられ日本人の意識に根付いてきたと考えられる。こうした構造によって家の宗教は受け継がれたのだが、もはやこれまで通りにはならない状況に陥っている。そして、この構造の崩壊は今後も加速度的に進み、寺檀関係はいまや窮地に追い込まれている。寺院の誰もがそれに気づきながらも、根深い問題の解決を先送りにしたままにしている。

d. 寺院と檀信徒の信仰育成の構造

これまで家の宗教が日本人のモラル、生活規範の根底に根付いてきたと述べたが、宗教意識の希薄化、核家族化による家族形態の変容は、家の宗教を引き継ぐ素地を根こそぎ絶やす現実を生み落としている。家の宗教を復興・維持しなければ、菩提寺の存立基盤が危うくなることは明明白白である。寺院はこれから檀信徒の宗教意識(家の宗教)をどうするのか？ 檀信徒に家の宗教を積極的に指導教育してゆくのか？ その他の檀信徒教化を模索するのか？ いま、寺檀関係は大きな分岐点にあると言えるし、寺院がこれまでの活動で事足れる要素は何もなきに等しいだろう。

人口減少と少子高齢化(=無縁墓地の増加)、宗教意識の希薄化は寺檀関係を無条件に弱体化させる。こうした現況にあって、寺院は何をすれば檀信徒との絆をいま一度、強めてゆくことができるのか？ 一つには仏事を檀家任せにするのではなく、檀家に対して常に意識的・積極的に指導する機会を創ることが求められる。もう一つは檀家が菩提寺を訪れる機会が多くなるように工夫して働きかけることである。どんな工夫が考えられるのか？ 年中行事を新しく始める、これまでの行事を活性化させる。また新しい教化行事や教化活動によって寺門に檀信徒を招き入れる機会を創ることも考えられる。故に本宗は、教化年次テーマにおいて強

調する教化活動を提案している。

これは、半世紀前に本宗で推進されたつくしあい運動の際に呼びかけられた「家の宗教(信仰)から個の信仰へ……檀徒から信徒へ」を具体的に実践する取り組みである。その当時よりも寺院の置かれている状況はずっと危うい。だから今は「家の宗教の復興」と「個の信仰を育む教化行事の展開」の双方を、寺檀関係を強化する方策としなければならない。もう面倒に思ったり、頭からあきらめたり、躊躇している状況は過ぎている。理屈抜きに取り組まなければ、寺院のご本尊の法灯はきっと絶えてしまう。宗教意識を培い、檀徒の信仰を育む機会を寺院が創れなければ、その将来は見る影もない。

e. 菩提寺への信仰と浄土(死生)観による構造

檀信徒の信仰を育む。その信仰とはどのようなものか？ 仏教(釈尊)に対する信仰か、祖師である弘法大師空海に対するものか。それも勿論であるが、ここではもっと現実的な視点をもとに場面を想定する。家の宗教と最も密接な菩提寺に対する信仰、つまり菩提寺のご本尊さまに対する信仰である。つまり寺檀関係の強化をはかる際に最も核心となるのは、菩提寺のご本尊さまと檀信徒をいかに結びつけるか？である。お墓をお参りすることはあっても、ご本尊さまには手を合わせない、お参りしないという風景がこれまでの真言宗寺院であり、檀信徒のご本尊に対する意識は、信徒寺院に比べてかなり低いだろう。

寺檀関係の強化の最重要課題は、檀信徒の意識を菩提寺のご本尊へいかに向けるか？ 本尊信仰をいかに育むかである。このことを宗団挙げて教化推進の柱とすることが、これからの寺院の存続に関わることになる。檀信徒は菩提寺のご本尊を心のよりどころとし、支えとする。そのために檀信徒がいかにご本尊への信心を発し、培うか？ 檀信徒の信仰を育成するにはどんな教化活動が必要か？ 檀信徒がご本尊への信心を深めるには何ができるのか？という強い意欲を抱いてひとつひとつ実践すれば、寺檀関係の強化は現実的なものへとかたちを変えることになる。

真言宗寺院の本堂内は仏の世界を顕現させたものであり、ご本尊さまの浄土をビジュアル化したものとも言える。そうした意識を我々がどれくらい日頃から抱き、檀信徒に説いているだろうか？ その土地で最も由緒正しい聖なるもの。その地に暮らす人のよりどころとなり、暮らしを支えてきた存在、それが菩提寺のご本尊さまである。そして、檀信徒が死を迎えれば菩提寺の住職に引導を渡され

真言宗智山派における教化研究(伝道学)の現況とこれから (片野)

仏と成って行く先である浄土、それを目の当たりにできる空間がご本堂である。真言宗寺院住職が檀信徒に引導を渡して迷わず成仏させる。だから、我々は日々の勤行、自行等によってご本尊の威力(パワー)を頂いて身に染めるのである。菩提寺を持つ檀信徒は成仏することがすでに約束されている。死んだ後には、菩提寺のあの本堂の内陣にある世界、ご本尊の浄土へと渡るのである。

檀信徒誰もの密厳浄土は、その地にゆかりの真言寺院で目にすることができる。このご本尊さまと檀信徒を引き合わせ、ご縁を結ぶ。その役目を我々は担っている。だから、ご本尊さまの宝前で発心式や継承式を執行してご縁を結ぶことを推奨している。密厳浄土(菩提寺=修行道場)で仏を信じ、仏と出会い、仏と成る。こうした観点からも、檀信徒にとって菩提寺の存在価値を簡潔に説くことが住職の最大の役割となるのである。

3. 教化研究・伝道学の範疇—教化・伝道を学ぶために

真言宗寺院は自らの存立を支える檀信徒といかに接するか？ 檀信徒の心にご本尊への信仰を抱かせるか？ そのために、いかに檀信徒を寺院に招き入れるか？ 寺院がこれから存続してゆくには、こうした檀信徒教化の方法論が必要となる。現場の寺院住職の役割は、これまでの発想や慣習とは趣を異とするだろう。檀信徒と接する現場で様々な状況を想定した住職・教師を養成することが、これからの教化・伝道学に求められている。檀信徒が寺院を訪れる機会を増やすためのノウハウ、檀信徒と接するスキルをいかに身に付けるか？ そのためのトレーニングが教化における教師養成の課題である。これを踏まえた体系的な教師養成の教育カリキュラムが以下のとおりである。

教化概論 「教化論—教化とは何か？」「教化構造論」「仏教信仰史」「現代教化史」

教化各論 「本尊論」「輪廻・業論—死生観」「先祖供養論—家の宗教・仏事」「葬送儀礼」「宗教体験論」「寺院活性論—年中・教化行事」「檀信徒論—檀信徒が望むもの」「信仰救済論—檀信徒の信仰育成」「情報伝達論—表現方法」「社会問題」「地域社会貢献論」

教化演習Ⅰ—討論会・ディベート

「人は死んだらどこへ行くか？」「信じる者は救われるか？」

「戒名はなぜ必要か?」「魂は存在するか?」「宗教体験」他
教化演習Ⅱ—グループ(事例)研究

「葬送儀礼」「寺院年中行事」「仏事」「他宗派の教化」等
教化演習Ⅲ—ロールプレイ

「檀信徒相談」「発心(継承)式」「結縁灌頂」「葬送儀礼」等
教化実習Ⅰ 「法話」「文書伝道」

教化実習Ⅱ 「御詠歌」「写経・写仏」「巡礼・遍路・団参」「寺小屋(青少年教化)」

教化実習Ⅲ 「阿字観実修」「本尊法修法」「作法集」「修行体験」等

教化研究、伝道学は、これまで「いかに伝えるか?」「何を伝えるか?」が主題というより、住職教師が主体で檀信徒に何をするか、その方法・技術論に終始してきた。また、これまで教団の教義がいかに社会問題にコミットするか、現代社会にいかに関わるか、宗教学や社会学的視点から論じられてきた。しかし、そうした教化研究の手法では、教化の本質論に至ることはもう難しい。

教化研究の本来の目的は「いかに伝えるか」「何を伝えるか」が主題であったが、これまで対象となる檀信徒を主体とする研究的視点はなかなか確立できなかった。また、檀信徒の信仰をいかに育むか、檀信徒と共に宗教的感動を得るという仏・本尊への信仰育成プログラムもこれまでの教化研究では、ほとんど論じられていない。しかし、檀信徒の視点を強く意識しなければ、教化研究の本質に行きつくことは困難である。教化は何をどう伝えるか、そしてそれが伝わったかどうかは、その後の檀信徒の信仰生活、その教えを支えとし拠り所としてきたかどうかにつながってゆく。

また、檀信徒が胸の奥底に秘める不安、「人は死んだらどこへ行くか?」「信じる者は救われるか?」という疑問に応える術を様々な観点から学び、檀信徒の安寧に応えるスキルを身に付けること。これまでの日本における仏教信仰の流れ、輪廻・業や魂の存在について考える機会を常につくることが求められるだろう。教理と現実の不安を、いかに結びつけるかという感性を養うことが何よりも必要となってくる。そして、これから住職・教師になる人材の養成には、檀信徒と共に歩み信仰を育む姿勢が最も大切であり、それを教化・伝道の根幹として教育・研修を積むことが、これからの住職に求められる。そのためのカリキュラムをここに提案した。単に知識を学ぶだけでなく、ロールプレイや意見交換、グループ

研究、実修など寺院の現場で即実践が可能となるスキルを身につけることに重きを置いている。

4. 本宗における教化の実際—現在の教化推進の実体

真言宗智山派における教化推進の実際は、

- ①寺院の現場で檀信徒と教化活動を実践できる人材の養成
- ②人材養成、教師のスキルアップのための研修体制の拡充
- ③教化推進ソフト(テーマ・実践理論)の構築
- ④寺院で活動を実践できる教化アイテムの整備

の4つが柱となる。この教化推進施策は宗勢(総合)調査のデータ及び宗内諸機関の見解、そして各教区などの研修機会での参加者の声を可能な限り反映して構築されてきた。それが以下の真言宗智山派の教化推進施策の実体、全容である。

a. スローガン(テーマ)運動の継続

昭和40年代に日本中に吹き荒れた新宗教の教化運動は、既成教団に衝撃的に外圧として及び、既成教団も教化運動の推進を余儀なくされた。真言宗智山派においても「つくしあい理念に基づく教化運動の展開」による教化推進が始まった。この時のスローガンが「つくしあい」であり、これに連動して教化関係の宗派出版物には「生きる力」の言葉が冠された。こうした教化運動のスローガンは運動形骸化の象徴と揶揄されることが長く続くのだが、真言宗智山派では平成9年度より、それまでの教化運動の体制について徹底的な検証を企て、新しい教化推進施策を構築するに到った。この新展開において、何よりもまず教化のスローガンを提示するかどうか諸々の検証がなされたが、最終的には宗内外へ新しい教化推進施策に関する情報発信を行う際に、寺院や檀信徒に分かりやすい目標となるテーマないしはスローガンがやはり必要という認識に至り、教化目標「生きる力—安らかなる心を求めて」を提案した。また、こうした目標が形骸化することを避けるため、教化目標を「中長期的(4年間)目標」として、その下に具体的な寺院の教化活動の指針となる4年間の「教化年次テーマ」を以下のように設定することにした。

- 1年次「檀信徒が智山勤行式をお唱えするよう徹底をはかろう！」
- 2年次「檀信徒が日常的に礼拝することを奨励しよう！」
- 3年次「檀信徒と共に宗教的感動を体験しよう！」

—御詠歌、写経・写仏、巡礼・遍路・団参—

4 年次「心に安心の感得を目指そう！—阿字観、発心式、結縁灌頂—」

教化目標というスローガンを大きく掲げ、しかし、そのスローガンが色あせないために具体的かつ実践可能な活動を年次テーマとして発信し、檀信徒と宗教的感動を共感するスタイルを考案した。こうした教化活動を檀信徒と実践することで教化目標が達成できる道筋を指し示したのである。

b. 個の信仰育成(自己実現)のための具体的・実践的プログラム

この教化年次テーマの提案は、そのまま寺院で檀信徒にはたらきかけ、共に実践できるものを想定している。「智山勤行式の唱和の徹底」と「お仏壇の礼拝の奨励」は、寺院の檀家が家の宗教や仏事を受け継ぐために欠かせない営みで、お仏壇の荘厳・礼拝を奨励し、各家の仏事を根付かせるために最低限必要なことである。これまでは各檀家が、「家の宗教」を自ら伝えてきたわけだが、現在の社会状況では、これまで当たり前伝えられたものが、いつの間にか喪失され、受け継がれなくなりつつある。その原因は様々に考えられるだろう。

物理的には居住空間の劇的変化—一家の中心にあった仏壇が邪魔になる現況—や、核家族化—一家の宗教の伝承の困難さ—等が大きな要因となろう。檀家任せにした家の宗教・仏事の伝承を、寺院が積極的かつ懇切丁寧に指導するように意識を変え、現実に対応することを呼びかけた。家の宗教の「復興と維持」がこの2年に渡る教化年次テーマの底流にある意図であり、これはこれからの寺院存立の根幹を成すものでもある。

家の宗教と仏事は、この現代社会がこれまでの家族形態の崩壊を容認するならば、共に連動して家の宗教も崩壊の道を加速度的に進めることになる。しかし、この社会は「家意識」の崩壊を簡単に受け容れられるのだろうか？ 確かに見た目には「家意識」の崩壊は始まっている。完全に崩れ去るかのような勢いで進展しているように見える。だが、果たして本当に「家意識」は崩壊するのか？ 同じように墓参する人々からは、本当に先祖崇拜意識が抜け落ちているのか？ 現に、墓に対する意識調査等、データからはそう読み取れる。しかし、実際には潜在的に我々が綿々と受け継いできた仏事や先祖崇拜が、そう易々と現代人の意識下から喪失してしまうとは未だに信じられない。むしろ、現代人のポテンシャルに宗教意識は深い眠りに陥ったままなのではないかと確信的な理解を未だに抱いている。

家の宗教を復興し維持しながら、いま寺院がダブルスタンダードとしてもう一つ取り組む必要にさらされているのが、個の信仰を育む活動を営むことである。寺院が檀信徒教化に取り組まなければ、自らの存続がおぼつかなくなる時代をすでに迎えている。檀家の家族一人一人が菩提寺の年中行事や教化行事(活動)に参加するには何をするか? 檀信徒がお寺を訪れるにはどうしたらいいか? その活動をどう告知するか、檀徒一人一人の心に信仰を育ませることをイメージしながら寺院活動を営む時代が到来している。

個の信仰を育むことが所詮、理想だと考える寺院住職も恐らく多いだろう。確かに現実にはそれほど上手くいかない。理想を語っているだけでは生きて行けない。しかし、「現実を目を向けたら、そんなことは机上の空論だ」と思ってしまうなら、寺院は単なる風景の一部となり、寺院に存在感を見出す檀信徒は誰もいなくなってしまう。その発想が長い歲月の中で積み上げられ、今日の寺院の現況と檀信徒の宗教意識の希薄化を招いてきた。その張本人は我々自身なのである。

個の信仰を育む手立ては、仏教にはいくつも培われている。迷える衆生を救う方法論は数多も編み出されて、これまで仏教の救済機能として整えられてきた。そしてその機能はこれまでに充分すぎる効果を発揮し実践され実証されている。素晴らしい教えがあり、救済のための実践活動(ノウハウ)を装備しているからこそ、仏教は今日まで脈々と息づき、人々の篤い信仰を集めている。そうした機能があることを知らぬまま、その機能を発揮させる能力を身につけなければ、実践的活動も理想という机上の空論と化してしまう。教化年次テーマで提案する教化活動はどれも皆、苦しみ、迷える衆生を癒し、生きる力を漲らせるものである。そして寺院の年中行事や教化活動を意識して活動すれば、檀信徒の信仰はいつか発し、育まれ、深まってゆく、そうした信仰プログラムが、すでに自然とカタチづくられてきた。だから仏教は無上甚深微妙の法なのである。

c. 現場(寺院・教会)で檀信徒と接する人材を養成する研修機会

こうした仏教ないしは真言宗がずっと培ってきた機能を認識し、その機能を実践向きに変換した教化活動を檀信徒に指導できるスキルを身につける機会、教化推進施策の最大の柱となる。つまり宗団が行う教化の多くは、住職・教師・寺家庭婦人などのスキルアップをはかる人的研鑽のための研修機会を多く創り、更にはそうした研修機会の質的向上をはかるプログラムを構築することである。

このために、真言宗智山派主催の研修機会はこの十数年に渡って意識的・積極

的に拡充をはかってきた。その主なものを挙げれば以下のとおりである。

教師総合研修会、智山伝法院講座、阿字観指導者養成講座

青少幼年教化指導者養成講座、寺子屋交流会

寺庭婦人講習会、寺庭婦人入門講習会、寺院子弟講習会

教化活動実践セミナー、愛宕薬師フォーラム

檀信徒研修会、別院真福寺阿字観会、写経・写仏智積院大会

その他(※平成25年度より住職主管者講習会・布教師養成所が加わる予定)

これらの研修機会は、住職・教師対象のもの、寺庭婦人対象のもの、寺庭婦人も参加可能なもの、檀信徒対象のものとそれぞれが有機的に連関し合っている。特に近年は、寺庭婦人や檀信徒も共に宗教的感動を得られる研修機会を提供する傾向となりつつある。檀信徒が参加できる研修会や檀信徒対象の研修機会では、参加した住職・教師が檀信徒に直接、実践的に指導できる機会と位置付け開かれている。住職・教師・寺庭婦人・檀信徒が共に研修できるオープンな機会を模索することで、檀信徒教化を、身を持って実感しながら、互いに学べる利点を生かそうという試みである。

また研修内容、つまり研修プログラムの充実もこうした研修機会に欠かせない。前述した伝道学や教化研究の教育・研修カリキュラムをベースとして、更に内容のみならず、研修形式も様々な手法を取り入れることが求められている。寺院が檀信徒教化を実践する場面を想定した事例研究やロールプレイ、意見交換やディベート、グループ研究発表など参加者が身を持って研修でき、スキルを高められる機会がウエートを占めることになる。檀信徒教化には「教えを正しく学ぶ」「理解したことを実感する」そして「実感したことを表現して伝わる」という教相・事相・教化のリンクが欠かせない。だからこそ、教化研修のテーマは多岐に渡るだろうし、現実・現場に即したテーマ設定が求められる。こうした研修機会の拡充は宗団の存立と宗団教化の生命線である。何故なら、研修機会の拡充は人材の養成に最も効果が期待できるものであるし、それが宗祖弘法大師の「法は人によって弘まる」のお言葉を体現するものに他ならないからである。

d. 寺院を活性化(元気に)させる地域研究会(教区教化研究会)

宗派が研修機会をさまざまに拡充することは、そこで実施される研修機会の内容、研修プログラムの質的向上につながる。それと同時に、宗派主催の研修機会の充実は勿論であるが、現実的に宗派が開催する研修機会に宗内住職・教師・寺

真言宗智山派における教化研究(伝道学)の現況とこれから (片野)

庭婦人等が参加できる可能性は時間的・物理的に限りがある。また寺院における檀信徒教化によって生じる問題は、その地域によって大きな差異がある。地域格差のみならず寺院の基盤となる経済格差も当然ながら拡大する一方なのが現状である。

つまり宗派主催の研修機会に参画できる人材はほんの恵まれた一握りに過ぎない。そして檀信徒教化を实践できる人材を広く養成するには、これだけでは十分とは言い難い。その地域に起居する寺院の住職・教師・寺庭婦人・檀信徒が無理なく研修できる機会を創り出すことが、宗団教化の次の柱となる推進施策である。こうしたことから地域格差とそれに伴う構造的な経済格差という本宗の現況に対応する教化推進として「教区を核とする寺院の檀信徒教化の展開」をはかる施策を講じたのである。その地域の特性や習俗に応じられる寺院の檀信徒教化について、情報・意見の交換の場、更には事例研究や議論ができる研修機会、教化をテーマとした研究会として発足したのが教区教化研究会である。

このように地域の特性を活かしたテーマによる教化研究会は、発足から10数年を経て開催教区は増えてきたものの、まだまだ開催の重要性がしっかりと認識されるまでには至っていない。教区の参加者が自分達の身近な問題や興味深いテーマについて研鑽できるこの機会は、教区によっては寺庭婦人の参加を受け入れる教区もある。寺院で起こる問題は、住職と寺庭婦人が共有する問題として山積している。そうした中で教区管内の人材の養成を教区が積極的に推進することは、そのまま管内寺院の将来の活性化につながってゆく。先を見据えた人材の養成は寺院の明日をかたちづくってゆく。そしてこの研修機会の充実をはかるには、宗派主催の様々な研修機会のプログラムを参考にしながら、教区が自由に独自の研究会を企画してゆくことが何より求められる。

例えば昨今の葬送儀礼事情は、地域の特性が色濃く出る問題でもある。また現在話題となっている様々な社会問題(自死、いじめ、檀信徒相談、地域興し、青少幼年教化等)に取り組んでみるのも興味深いだろう。前述したとおり「人は死んだらどこへ行くか?」のテーマのもと、仏事・葬送儀礼・戒名の意義・靈魂観・墓地問題等の具体的話題が提供できるし、「信じる者は救われるか?」がテーマなら、本尊信仰・教化活動による信仰育成・自己実現等について意見交換することも考えられる。こうしたテーマは、その場限りでイベント的に行うのではなく、数年に渡って同じテーマを教区内でじっくり取り組むことも必要である。こうした地

域に根差した研究テーマが積み重ねられれば、それが本宗における教化研究への一翼へとつながってゆくことになるはずである。現場、実践から積み上げられる研究成果は、後の真言宗智山派の教化推進施策へ結びつくことにもなるだろう。

e. 教区管内寺院の檀信徒のためのミーティング(檀信徒教化推進会議)

教区が宗団教化の地域の中核となるもう一つの要因は、管内寺院において経済的基盤が脆弱で檀信徒教化が十全に行えない寺院をフォローすることにある。兼職等によって教化活動が思うように行えない寺院の檀信徒が真言宗の教えに触れられるために、教区が寺院をフォローして檀信徒教化を行う機会が教区檀信徒教化推進会議である。また、一寺院で実行が難しい教化活動や信仰育成プログラムを教区が主催して、檀信徒が真言密教の世界を体感できる機会にもなる。教区管内の寺院に所属する檀信徒が等しく研修機会を得られるのもので、この研修機会は寺院住職・寺庭婦人・寺族・檀信徒が一堂に会して、共に宗教的感動を分かち合うミーティングとなるのである。

近年の真言宗智山派の教化は、寺院住職・教師・寺庭婦人と檀信徒が同じ機会に共に仏に祈り、仏と出会い、仏を感じることを特に意識している。これは普回向の精神を体現するものでもあり、それぞれの立場は違っても、同じテーマや話題について、共に考え、共に励み、共に実感することを目的としている。寺院が檀信徒教化を行う際の閉塞感や限界を突き抜けて、地域性のある程度共有する真言寺院が、檀信徒と共に仏の世界を観じることこそが、これからの地域格差、経済格差を少しでも薄めてゆく研修機会へとつながる可能性を期待するものである。この教化推進会議がそうした根深い問題をすべて解決できるわけではないが、こうした活動が地域興しや、新しい檀信徒教化の将来への道筋を見出す契機と成りうるかも知れない。それこそが、教区が本宗の教化推進施策の中核と位置付ける理由である。何もしないまま手をこまねいていても何も解決しない。出来ること、可能性のあることを探し出しトライするしか、未来は拓けないだろう。

f. 教化活動アイテムの環境整備

これまで、寺院で檀信徒のために新しく何か教化活動を行おうという意欲を住職・教師・寺庭婦人が抱いても、何を行ったらいいのか、檀信徒にどう指導していいのか分からない、だから行えないと挫折するケースが幾つもあっただろう。また、実際に教化活動を始めてはみたものの、檀信徒に自信を持って指導できない、不安や疑問を抱えながら自己流の活動を続けているという声も耳にしてきた。

真言宗智山派における教化研究(伝道学)の現況とこれから (片野)

檀信徒に教化活動や仏事の指導をいかに行うか、そうした教育や研修がこれまで正当に具体的に行われてこなかった智山派の現実がここにある。

葬送儀礼や年中行事についても、宗派の教義に照らすよりも、その地域の習俗や慣習によって師僧が修してきたことをそのまま行うことも現場の寺院ではあり得ることである。そうした中、新しく檀信徒と接する機会に、我々はいわく言い難い不安を抱えたまま、寺院で活動を修してゆく宿命ともいえる不条理さを抱えている。教化活動を通じて檀信徒を指導する際に、利便性に優れた資料・教材、不安を拭い去れる簡潔明瞭な指導法(マニュアル)があれば……そうしたこれまで声にならない声に応えるために、本宗は、寺院で檀信徒教化を行う住職・教師・寺庭婦人が少しでも自信を持って実践できる環境を整備しようと取り組んできた。教化活動を行う際に檀信徒に配布して指導・実践できる資料、指導のための手引書、備品(教化アイテム等)などを製作し、すぐに寺院で教化活動が開催できるよう企画した。そして、そうしたアイテムを活用し、指導できるスキルを身に付ける研修機会が前述の教化研究会等である。

また、寺院において教化活動が行えるという環境を広報するために、檀信徒向けの情報誌、教化活動への理解を深めるパンフレット、教化年次テーマ啓発のためのしおり、ポスター等を作製してきた。さらに教師・寺庭婦人が檀信徒教化を実践する必要性を説く情報誌や、教化活動をすぐに行えるハンドブックを作製して啓発に努めている。以下に出版物と教化アイテムを紹介しておく。

【教師用】

智山ジャーナル、教化ライブラリー、教化推進ハンドブック、発心式作法、阿字観本尊、阿字観作法、写経セット、写仏セット、密厳流御詠歌 CD、「自死対策」リーフレット等

【檀信徒用】

生きる力 SHINGON、智山檀信徒叢書、教化推進しおり、教化年次テーマポスター、ポスターカレンダー、柱掛けカレンダー、教化推進パンフレット「お仏壇」「智山勤行式」「御詠歌」「写経」「写仏」「巡礼遍路団参」「発心式」「阿字観」「結縁灌頂」、青少幼年リーフレット、十善戒絵説き図、リーフレット「拝む心と十善戒」「阿字の心と十善戒」等

5. 本宗における教化伝道学の展望—新しい教化研究への取り組み

我々はいま、この現代社会という時代に生を受け、寺院に身を置いて、仏教・真言宗の教えが素晴らしく凄いモノかを、一体どれくらい身に染みて感じているのだろう。ここに至るまで、日本において仏教寺院が脈々と法灯を受け継ぎ、その地に存立してきたのか。それはこの教えが、その時代を生きる人々を苦しみや迷いから掬い取ってきたから……、人の支えとなる本物の教えだったからに他ならない。長い歴史と伝統の中で、培われてきた衆生を救う手立てを有し、今もなお、それが十分に機能しているから、人々は寺院に参詣し、手を合わせ、祈る。しかし、本物の教え、法灯はいま、寺院に起居する我々によって廃れようとしているのではないだろうか。

本当に良いものは長きに渡って伝えられる。だから古きものは長く伝えられて今日に存在しているから本物であるとも言える。大学で数年間、学生にアンケートを行なった時「古臭くて堅苦しいもの」それが仏教のイメージだと多くが答えた。そうしたイメージを植え付けたのは今を生きる我々自身である。抹香臭いと言われながらも、現在、アロマセラピーや仏像ブームが世間を賑わせている。しかしそうした話題は、我々からは何故か距離のある遠い存在のように感じられる。弘法大師 1150 年御遠忌の頃の密教ブームも今は昔の趣である。我々はいつも世間の求めに敏感にはなりきれない。求めに応えられない体質が既成教団の実態である。だからまず教化を行うのか？ 教化を行ったところで徒労に終わることになると考えて諦めてしまうのか……。我々は選択する時を向えている

抹香臭いイメージに塗れた教えは、しかし本物である。そして、その教えは生きとし生けるものをしっかりと掬い取る威力を備えている。だから真言宗智山派は、法が人によって弘まるが故に、人材を養成するシステム(宗派・教区の研修体制等)を教化推進施策の柱に据え、推進のための指針(教化目標や年次テーマ)を掲げ、現場の寺院が教化活動を実践しやすい環境整備を進めてきた。

こうした調査データと生の声を集約し、本宗寺院の現況を踏まえて教化推進施策を構築し実行に移す。さらに施策の効果・結果を改めて調査データと種々の意見を収集して、次の施策に活かす。このように「調査→議論→施策の構築→実施→効果」の積み重ねが、現代社会における教化研究の主軸となるのである。現場に還元する研究成果を求めることのない教化研究とか伝道学は、その意味合いが極めて薄いと言わざるを得ない。教化研究はこれからの教化推進施策を創出する

真言宗智山派における教化研究(伝道学)の現況とこれから (片野)

ための研究・学であり、現場(寺院)で生じる問題を推測し、将来的にかつ現場による見地から効果的な施策を教化面から提案することが求められる。また、これまでの検証・研究より導き出された教化推進(寺院の活性化策など)施策を実施する。さらに、施行する教化推進を宗派・教区・寺院各レベルで議論・意見交換して研究成果を積み上げ、宗内さまざまなレベルで得た成果を次代の教化推進施策に反映させることが必要である。「寺院を元気にする」施策は机上のものではなく、宗内の情報の共有、研修、情報・意見交換、議論の集約から生み出されるのである。仏の教えと社会(問題)との接点、また寺院の社会的存在意義という視点は教化研究の一部分、主たる目的の参考資料に過ぎない。宗団が、寺院が檀信徒教化をいかに行うか？ 何をどう伝えるのか？ そしてその効果がいかなるものか？ こうした視点を主眼としないと教化研究の本質には踏み入れないのである。

ま と め

本宗の教化推進施策はまだまだ道半ばであるが、施策の基本線は概ね確立されたと考えられるだろう。何を伝えるのか、どう伝えるのかという教化推進の骨格みは組み立てられた。後は、寺院の現況をいかに改善させるか、つまり行政的な施策を的確に講じない限り、せっかく構築された教化推進施策も寺院を活性化させ、檀信徒を元気づけることと結びつかない。行政的施策とは何か？ それは寺院の墓地問題や兼務寺院問題(寺院統廃合)等である。既成教団の行政がこれから果たす役割は、多岐にわたるばかりでなく、特に全国の末寺の存立を将来的にどうしてゆくのか？ 末寺の存立にしっかりと関わり、それぞれの現況を仔細に把握して、宗派としての対応、方向性を打ち出すことが必要である。いまこの問題に取り組まないと廃れる寺院が後から後へと続くことになり、宗派の存在自体が必ず危ういものとなる。

ブームの最中でも、仏教の素晴らしさ、その奥底まではなかなか伝わらない。それはブームがあっても、現代人がどんなに救いや癒しを求めても、仏教界ないしは寺院が、わが教えの素晴らしさ、その深いところを伝えようとしない現実がある。何故ならそれは、伝えられる術を身に付けていないからである。そして、われわれ自身が仏教の素晴らしさ自体を確信していないから、ブームはいつしか廃れてしまう。寺院にとってこれからの現実はきっと過酷なものとなる。過疎地問題、墓地問題、自死問題、さらには青少幼年に対する教化等の宗内啓発と具体

的対応、特に過疎地と兼務寺院問題、墓地問題は宗派行政としてもこれから喫緊の課題となる。寺院が元気になる要素は、経済的基盤と人が集まる環境整備の双方がかみ合って初めて生まれてくる。そのことを宗派が熟知してサポート体制を構築しなければ、宗派自体が体を成さなくなる。

教化研究とは仏の教え、祖師の想いが法灯として受け継がれるために何が必要かを考究するものである。廃れるものと受け継がれるもの。しかし、それは人によってその成否が決められる。人によって法が弘まるのであるなら、人と拠点となる寺院が元気に活動できる場を創らなければならない。宗教・文化・芸術が後の世に語り継がれ、人々の心に明りを灯す。その橋渡し役を仰せつかったのは誰であろう我々真言僧侶である。真言寺院に起居するものの宿命、そうして選ばれた誇りを胸に刻んで、なぜ檀信徒教化をするのか？という自問自答に応えたいものである。

本宗の教化推進の息吹きが、全国の山あいや海辺にたたずむ寺院に伝わってゆくこと、大震災で被災された寺院の復興の一助につながることを、そればかりを切に願うものである。

以 上

〈キーワード〉寺院活性化、寺檀関係、ご本尊さまに祈る、仏さまと出会う